

水原秋櫻子のある山岳俳句：何故、秋櫻子は乗鞍岳を目指したのか

野中，亮介
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/22666>

出版情報：九大日文．18，pp.2-26，2011-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

水原秋櫻子のある山岳俳句

——何故、秋櫻子は乗鞍岳を屈指したのか——

NONAKA
野中 亮介

一 はじめに

俳句に山岳を詠み込むようになったのは、俳句がまだ俳諧と呼ばれていた時、芭蕉の月山登山の発句⁽¹⁾がその先驅をなすと考えられている。⁽²⁾さらに、文学としての「山岳」が近代に入ってからである⁽³⁾ように、俳句史の上では大正四年の河東碧梧桐の日本アルプス縦断記『雪線踏破七日記程』があり、数句作品が見られる⁽⁴⁾が、昭和期に入って石橋辰之助⁽⁵⁾が「朝焼の雲海尾根を溢れ落つ」（『山行』）を七年「馬酔木」に投句し、十年には水原秋櫻子⁽⁶⁾が乗鞍岳登山の（雪渓をかなしと見たり夜もひかる）（『秋苑』）などを、十二年には前田普羅が（駒ヶ岳凍てて巖を落しけり）（『焦鈴舎集』）他を発表することで山岳俳句は本格的になった。さらに十四年には古屋樵夫が『単独登攀者』を上梓、同年、福田蓼汀は八ヶ岳登山を契機に日本各地の名山を踏破していったが、「山岳俳句とはみずからの足で山へ登り、山岳に対して夢と憧憬を生涯もちつづけた俳句のみにいえることとでそういう人を山岳俳人と呼び他と区別する重要なポイントとなる」⁽⁷⁾とされており、山岳に登る経験なくして詠み込むこ

とは範疇にはない。

秋櫻子にはその生涯において二十四冊の句集と一冊の遺句集がある⁽⁸⁾が、最初にまとまった山岳詠が見られるのは、『葛飾』の「赤城の秋」十一句で、これは赤城山⁽⁹⁾に取材した作品であり、石橋辰之助の山岳詠よりも早い時期での発表であった。その中で昭和二年に詠まれた（啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々）について山本健吉は次のように述べている。

彼の作品が在来の俳句的情趣から抜け出ていかに斬新な明るい西洋画風な境地を開いているかと言うことだ。これらの新鮮な感覚に満ちた風景画が、それ以後の俳句の近代化に一つの方向をもたらしたことは、特筆しておかねばならない。在来の寂・葉ではとらえられない高原地帯の風光を印象画風に描き出したのは彼であった。（中略）／この句の感触には、いつまでも色あせない瑞々しさがある。このような句で「牧」と言うと、日本流の牧場よりも西洋流の meadow といった印象を受けるから不思議である。高爽な清澄な晩秋の空気さながらに美しい風景句として現出する。⁽¹⁰⁾

作者自身、

明治時代の俳句とちがって、明るい外光を採り入れたのがよかつたのであろう。印象画風の油彩が好きで、展覧会を

見ては勉強していた効果が、「桑の葉の」句（筆者註——桑の葉の照るに堪へゆく帰省かな『秋苑』）や、この句に至って現れたわけである。⁽¹¹⁾

このように述べ、自分の作風を意識して「印象画風の油彩」に倣ったと明かしている。さらに、鷹羽狩行は「キツツキヤ……マキノキギ」のキ音の反復で、「しらべ」による独自の小天地を作っている。（中略）「しらべ」による抒情が完成したかたちで定着され⁽¹²⁾、掲句の調べが印象画風の視覚的要素と相俟つて一枚の西洋画を成すことに大きく寄与している点を強調している。

そもそも秋櫻子は大正九年より宇都野研主宰の歌誌「朝の光」を通じて窪田空穂の指導を受けており、その調べに対する教えに深く共鳴している。

秋櫻子が東洋城の「洪柿」を離脱し虚子の「ホトトギス」に参加しようとする大正十年前後の、また短歌と俳句の両方に手を染めていた時期は、医学の上でも基礎の血清化学の研究も終わりいよいよ臨床に移るといふ多忙な頃で、加えて十二年九月一日には関東大震災により猿楽町の自宅および病院が延焼のため全失する⁽¹³⁾など、かなり作品制作の上でも混乱を極めた日々であった。事実、空穂からは顔を見る度に「両刀を使ふのはいけないね」と諭されている。⁽¹⁴⁾

当時の俳句（筆者註——大正十二年九月一日の関東大震災について

詠まれた作品を指す）の表現はいくつかの型を生じ、それによつて作句する人が多く、それが不思議とも思はれぬやうな沈滞状態にあつた。私は型によつて作句する無味乾燥さに堪へられぬようになつて来たので、この状態を脱するにはどうしたらよいかと考へはじめたが、そのときに思ひついたのが、嘗て先生から教へられた歌の調べといふことであつた。私は再び多くの歌集を読むことに没頭し、それによつて、短い俳句にも調べを使つて感情を現はし得ることが可能だといふ結論に達したので、その後は作句にも張り合ひが出来、いままでとはちがつた自分の句境がひらけて来るやうな気がした。⁽¹⁵⁾

秋櫻子の調べについて、仁平勝はたとえば〈葛飾や水漬きながらも早稲の秋〉（梨咲くと葛飾の野はとの曇り）を挙げ、「万葉集」の調べを「俳句のような短い形式に移植するには、万葉語そのものを詠み込めばいいという結論に達した」作品だとし、「ただしこのことは、たしかに秋櫻子のオリジナリテイではあつても、それをはたして「主観」の表現と呼ぶことはできるのかどうか⁽¹⁶⁾と疑問を投げかけている。このような古語の積極的な使用はそれまでの「ホトトギス」の詠法を韻律の上から「耳新しい」こととして変えて行くという点では十分な効果があつた。たとえ、秋櫻子俳句の万葉語が作者の主観そのものではなくとも、大衆化していた「ホトトギス」の読者達にとつて流麗典雅な『葛飾』の調べは魅力的であつたに違いない。事実、す

ぐに潰れると言われていた「馬酔木」の投句者、購読者が順調に伸びていった⁽¹⁷⁾ことは、主宰の西洋画的な構成とこの万葉調の調べの導入が功を奏しているとされる。⁽¹⁸⁾このように秋櫻子の窪田空穂への傾倒は、秋櫻子の『青水沫』と『鏡葉』の百五十枚の一篇を前にした空穂の子息であり歌人でもあつた窪田一郎の次の言葉でも裏付けられよう。

水原さんは大学に進まれる頃には俳句に専念され、やがて「馬酔木」の創刊ということになる。しばらく空穂を訪問することも途絶えるが、再び訪れるようになった時は、歌人と俳人という立場での事となるが、親しい交際は終世にわたつて深かつた。／空穂には多くの歌集があり、水原さんはそのすべてを読んでいられたが、その中からこの二つの歌集に就いて書かれたのは、若き日に影響を受け、新しい俳句へと志した時を回想されたためであつたのが知られる。／短歌にはいろいろの課題があるがつきつめると調べが生命であるということと空穂は水原さんに語つたとい⁽¹⁹⁾う。

「調べ」の重要さを説いた空穂への秋櫻子の傾倒ぶりが窺えるが、『青水沫』と『鏡葉』は第九、十歌集にあたり出版されたのは大正十年、十五年のことである。しかし、秋櫻子は『明暗』『青みゆく空』を合わせた『空穂歌集』（明治四十五年刊）によつてすでに窪田空穂という歌人を知つており、その次に読ん

だ歌集が大正四年に上梓された第四歌集『濁れる川』であつた。

この歌集に載つてゐる穂高岳や槍ヶ岳の歌が私を夢中にしました。恰度小島鳥水氏が『日本アルプス』といふ四巻の大著を上梓、上高地がはじめて世に紹介された直後で、学生達はみな日本アルプスに熱中してゐた時代だからであつた。（中略）／『鳥聲集』、『泉のほとり』、『土を眺めて』、『朴の葉』の記憶はそれほどたしかでない。⁽²⁰⁾

秋櫻子が記憶にそれほどないという『鳥聲集』、『泉のほとり』、『土を眺めて』、『朴の葉』の四歌集は次女なつや妻藤野を亡くしたことが主題となつている。秋櫻子が空穂と最初に会うのは大正九年のことであるので、まだ直接、讐咳に接する前、この歌人から受けた影響は山岳への憧憬——短歌に山岳を詠み込む熱意であつたと言つてよい。さらに後年、短歌における調べの大切さを説かれて、山岳詠への調べの効果が作品に結実したと考えられる。

二 空穂の山岳詠から秋櫻子の学んだもの

『まひる野』（鹿鳴社 明治三十八年九月）は窪田空穂二十八歳の時の刊行で短歌二九三首、新体詩三十三篇を収めている。

夏に見る大天地はあをき壺われはこぼれて閃く雫

仰ぎ見る夏の天空を「あをき壺」と見なし、自らをそこから零れ生まれたひと「雫」であると捕らえた発想には創造主に対する強い感謝の気持ちが溢れており、自らを「閃く」存在と肯定的に表現した至福感が一首を満たしている。この作品は『まひる野』巻頭連「椎がもと」に収められているが、「天地」を認識して作られた最初の作品である。⁽²¹⁾『まひる野』から「濁れる川」と続く歌集において、この「天地」の素材は繰り返し用いられるが、沢口芙美は掲歌のような「美しい言葉如何なる精神からひき出されてきたかを考えると、空穂の宗教心と無縁ではないような気がする」と述べて、大岡信も「ここにはある種の宗教的情感の定着がある」⁽²³⁾旨を指摘している。

明治三十七年七月、東京専門学校を卒業した空穂は前年より、短歌欄選者を務めていた電報新聞社に社会部記者として入社した。吉江孤雁、水野葉舟と牛込若松町に下宿し柳町教会に通っては植村正久牧師の説教を聞き洗礼を受けるに至っている。⁽²⁴⁾こうした事実空穂が「天地」を意識した時、キリスト教を通じて神を意識し宗教心に芽生えつつあったことを示している。

さて、秋櫻子もそれに関しているろと読んでは心引かれた「日本アルプス」について、空穂は北アルプスであるが三回登攀し、その時々様子は紀行文と歌集にそれぞれまとめられている。⁽²⁵⁾

●第一回目

時期―大正二年八月、三十六歳。

登攀路―槍ヶ岳、焼岳。徳本峠を越え上高地より田代沼、明神池を経由して槍ヶ岳に入るも天候悪化のため「槍の肩」までで「槍の穂」は未踏。

紀行文―『日本アルプスへ』（天弦堂書房 大正五年七月）
歌集―『濁れる川』（国民文学社 大正四年五月）徳本峠・上高地八十首。「曾遊の日を思ひて」三首

『鳥聲集』（日東堂 大正五年十月）槍ヶ岳四十四首

●第二回目

時期―大正十一年七月、四十二歳。
登攀路―鳥帽子岳から槍ヶ岳へ縦走。「槍の穂」まで至る。
紀行文―『日本アルプス縦走記』（摩雲願書房 大正十二年七月）

句集―『鏡葉』（紅玉堂 大正十五年三月）三十七首。なお、後年、当時を思い起こして「鳥帽子岳の一夜」八首『茜雲』（西郊書房 昭和二十一年八月）に収める。

●第三回目

時期―大正十二年八月、四十三歳。
登攀路―乗鞍岳
句集―『鏡葉』三十四首。

こうして見てみると「日本アルプス」に取材した作品は『濁れる川』と『鏡葉』に集中しており、それに付随した紀行文もほぼ同時に発表されている。この時期は秋櫻子が空穂の作品をはじめ読んで読んだ時期と空穂に実際に会い教えを受けた時期に符

合する。前期では山岳についての憧憬を持つこととなり、後期では調べについての開眼をしているわけである。

窪田空穂の出生地は松本盆地の西に位置した長野県東筑摩郡和田村（現松本市和田）で、西には北アルプス、東には美ヶ原を望む地である。この風光明媚な信州の自然環境に生まれながら青年期に至るもなお山岳に積極的な関心を寄せることはなかった。

そもそも、「日本アルプス」という名称は明治三十一年イギリスの鍍金技師ウイリアム・ガウランド（一八四二〜一九二九）が槍ヶ岳に登り、ヨーロッパのアルプスにならつてアルペンのな山容をもつ山々という意味から命名したとされ、その後、ウオルター・ウエストーン（一八六一〜一九四〇）が二度目の登攀に成功した経緯を『日本アルプス登山と探検』（一八九六）として出版し、それにより逆に日本に普及した。初めは飛騨山脈のみを指していたが、後に木曾山脈を中央アルプス、赤石山脈を南アルプスとし、合わせて日本アルプスと呼ぶこととなった。⁽²⁶⁾ こうした土地に空穂が生誕したことが、自然に山岳にその作品を向かわせたとする考えもあるが、⁽²⁷⁾空穂自身は次のようにその理由を述べている。

私は山国信濃の者であるが、山は御嶽の他は知らなかつた。観光のため高山に登る者は、山嶽信仰者を除いてまったくなかつた。北アルプスは横浜の牧師ウエストーンが初めて踏破し、アルプス連峯に匹敵すると讃歎して世界に紹介した

ことによつて、にわかになつたのであつた。私の知っている限りでの登山者は、その方面で有名になつた小島鳥水と、朝日新聞社で、社から派遣された西村真次の両氏だけである。私の登山も、じつはこの両氏に刺激されてのことであつた。⁽²⁸⁾

小島鳥水は明治三十五年、岡野金次郎らと槍ヶ岳に登つたがそれを「鏈ヶ嶽探検記」と題して三十六年一月から十二月まで『文庫』に発表した。それまでに志賀重昂の『日本風景論』を読んで槍ヶ岳に憧れを抱いていた鳥水はその地の出身者という理由から『文庫』の記者であつた空穂に縦走路などを訊ねている。それがきっかけとなり空穂自身が槍ヶ岳への関心を強めて行つた。⁽²⁹⁾

空穂は明治二十八年、東京専門学校文学科に入学するため上京し、それ以来、東京と故郷を行き来するが、帰省の折には故郷に近い梓川付近をよく散策し「山の童」を著している。これは乗鞍岳と山麓の白骨温泉を訪ねた時の著述で、

ふと吾に返れば四辺のさま物畏しく、眼に入るものの尽く偉大なる心に消え去らんとぞする。海拔一万尺、夕されば星の花懸りて雲の影の色失はん辺りにはあらずやあらず、かしこき神の御裾の垂れて其息吹も通はん辺りと思へば、げに乗鞍の高峰は近く立てり、彼方は御岳、此方には槍ヶ嶽、晴れては富士も見え筑波も見ゆるか、さらばこは天上

の巨人群^{つど}ひ議^{はか}りて彼の大神護らん辺りか。⁽³⁰⁾

ここで空穂は登攀した乗鞍岳を中心にそこから見える限りを「大神護らん辺り」と捕らえていたことはやはり空穂の宗教心に根付くものであろう。

さて、空穂も秋櫻子も魅せられた小島烏水は「日本アルプス」について次のように述べている。

殊に穂高岳槍ヶ岳及び焼ヶ岳の如き日本山岳中でも大体において第一階級に属する大物を裾から見上げたやうな位置にある渓谷は日本アルプスを通じて他に比類がないと思はれる。／これを米国の国立公園にたとへればヨセミテ渓谷にラスセン火山公園を加へイヘルローストンの一部を添へたる如く（中略）純然たるアルプス的美観にして、これを世界的風景と推称しても過ぎたりとは思はぬ。⁽³¹⁾

河田和子は小島烏水が上高地渓谷についてこのように語っていることを挙げ「登山家の小島烏水は、上高地渓谷を、純然たる「アルプス的美観」にして「世界的風景」だと絶賛していた」ことを指摘しつつ、保田與重郎が烏水に対し「風景観について」の中で「新風景の紹介といふ今日の形のものでもやはりある雅趣からされてゐるのである。つまり不用や必要といふよりも、それらの紹介態度がすべて低級で俗悪なために雅趣といへないものをよりどころとして、たゞ奇抜な、露骨な西洋好みの風景

をあげ、好んで西洋の呼び名を冠してゐるのは、古来の何々八景といった呼び名とさへ異なつてゐる」ことを紹介し、「奇抜な、露骨な西洋好みの風景をあげ、好んで西洋の呼び名を冠してゐる」例として、まず考えられるのは「日本アルプス」である。日本新八景選定の際、小島烏水が上高地渓谷を「アルプス的美観」と賞賛したことが保田の念頭にあつたに違いない」と論考している。⁽³²⁾

もう一点、小島烏水が上高地の保護について書いた文章をみてみよう。

上高地は海面を抜くことも高く、気候も寒冷で、地味も瘠せているから、あまり大きい樹木も、深い森林もないわけであるが、それでも、その森の幽邃なことと、美しいことは、森影を反映する渓谷の水に一層の青味を加へ、梢から梢に唄い歩く、ガッチ（かけす鳥）の声は、原始的に森林を愛慕する叫びを思わせる、私は一昨年独逸の陸軍少佐で、スタインザアという人と、この温泉宿で、一緒になつたが、この人は森林国の独逸人だけあつて、森林を愛することは、祖国のようである、独逸の山岳会員で、二十年間登山をしてゐるのだそうで、四十三歳になるが、いまだに無妻であると言つてゐる、何でも財産を山に使ひ果すつもりだそうで、槍ヶ岳に登つて下りて来たところであるが、ちよつとした露出でも、樹木のないところは、山が剥けてしまつて、回復は容易に出来ないと言つていたが、上高地に来て、森

林の下を逍遙したときには、これこそ真に日本アルプスであると言って、帽子を振って、躍り上っていたそうだ。⁽³³⁾

ここで、独逸人のスタインザアが「帽子を振って、躍り上っていた」のは、「日本アルプス」でありながら、それは「森林の独逸」で「二十年間登山をした」森林と等価のものであった。つまり、スタインザアが喜んだのは日本にある「アルプス」のような山岳であった。

空穂は次のように昂ぶる気持ちを歌にしている。

夏を解くるその雪溪の雫かも天の高所を水のながるる
雪溪の雫流ると岩間ゆきかそけき音を天に立てたり
登りつかれ心かそかなり雪溪は真白く広く眼を引きてなだ
る

乗鞍岳三つ立つ峰のふところに湛えへて青き水のある見ぬ
高天に湛ふる水をめぐる雪わが見る今をかがやきいでぬ
山小屋に焚く青松のけぶる火に我の寄りゆき手をかざした
り

秋櫻子が空穂の歌に巡り会う以前に小島烏水や吉江孤雁などの紀行文に感動していたことは前に述べたが、それと同じ感動を『濁れる川』をはじめとした空穂の歌集で読み、短歌でもこのような素材が扱え、変わらぬ感動を受けるということに驚いたのではないか。さらに後年、空穂その人と会い調べの大切さ

を諄々と説かれたことで、山岳のすばらしさを散文ではなく、ごく短い韻文にて表現するにはその技術上の工夫が不可欠であることを実感したと考えることが出来る。つまり秋櫻子が師から受け継いだものは「西洋的な」日本の山岳、特に、日本アルプスのすばらしさであり、それを詠ずるに調べがいかに重要な要素であるかということであった。

三 秋櫻子のもうひとつの「日本アルプス」認識

冒頭に挙げた山本健吉の言葉のように秋櫻子の作風について斬新な明るい西洋画風な境地であるとよく評される。作者自身、囑目ではなく、題詠で作った次の句について以下のように自解している。

桑の葉の照るに堪へゆく帰省かな
その頃、(筆者註——大正十五年)油彩を見ることに興味を持ち、方々の展覧会を歩き廻ったが、真夏の桑畑の向うに、白い村落のあるような構図の画によく出合った。(中略)なんといつても夏日の照る桑の葉のいきれはつよく、それに堪えながらゆくのは相当な苦労だ——そういう場面を設定して詠んだ(後略)⁽³⁴⁾

積極的に油彩の輝きを自身の取り込もうとした秋櫻子の作句姿勢が感じられる。

このように印象画風の明るい作品で「ホトトギス」より出発した秋櫻子は終生絵画を好み、絵画そのものや画家の生涯を詠んだ。

巴里の絵のここに冴え返り並ぶあはれ 『岩礁』
雪きびしセザンヌ老残の記を読み 『霜林』

前句は佐伯祐三の生涯に感動しての作品である。しかしながら、秋櫻子の心をより惹いた画家はセザンヌであった。⁽³⁵⁾後句は秋櫻子が八王子に疎開していた時期に⁽³⁶⁾「一度大雪が降ると、八王子市では外に出られなくなる」ために籠もって「年老いてからのセザンヌのことをかなり詳しく書いてあった」書物を読み、感動して成した一句である。⁽³⁷⁾

芸術一筋につきつめて考える人だから、毎日の苦悩つづきである。そういう内容の本なので、私は実に気の毒にも思い、又、偉いものだと感じた。すでにこういう範例がある以上、雪などに恐れて、家に引き籠っているようでは到底、だめだと反省もするのであった。⁽³⁸⁾

その芸術家としての生き方を自らの「範例」とまでした秋櫻子にとってセザンヌは特別な存在であった。さらに、この偉大な画家に師事した安井曾太郎とは親しく、後に『安井曾太郎』という著書も成している⁽³⁹⁾が、その中に「上高地」と題した一

章がある。

「仏蘭西時代」をすっかり書き終わってから、またすこしわからぬところがあったので、私は石原君（筆者註——石原雅夫）と安井先生のお宅へうかがった。

と、訪問の意図が仏蘭西事情にあることを前提にしつつ、話は一水会へ出品した絵画に及ぶ。六回の展覧会に安井が「上高地」の作品を四点出していることを再認識した秋櫻子は、

安井先生の上高地の連作は、この通俗化せんとした景の中から真の美しさをとり出して描かれたもので、穂高岳も焼岳も霞沢岳もこゝにはじめて完全にその美しさを發揮したといふべきである。私はこれ等の画をあふいで、穂高岳の巖壁に去来する霧の音をきき、焼岳の噴出する硫黄の香にむせぶ思ひがする。さうしてしづかに眼をとぶるとき、梓川の清流の響が耳底によみがへる如き感さへ起るのである。（安井曾太郎）

このように秋櫻子は安井の絵画を観ることで「上高地」そのものを追体験している。そして、次のように結ぶ。

私は先生の仏蘭西留学時代に於ける河畔や山村の写生修業が、一筋の道となつてこゝに通じてゐることに思ひ到つた。

さうして画家の生涯をつらぬく勉強のきびしさが、ひしくと心に迫るのを感じた。(『安井曾太郎』)

秋櫻子が一水会に展示された安井の油彩の中に観ていたのは「上高地」を通じたこの画家の「仏蘭西留学時代」であった。そこで、安井は何を学んだのであろうか。『安井曾太郎』第三章「仏蘭西留学時代」で、昭和十年、安井が「アトリエ」の記者との一問一答⁽⁴⁰⁾を引用している。

あちらの作家で好きな人といふとどんな人でせうか(問)
あちらに行つた時には若くて幼稚なものだつたので、今考へてみると、もつと充分にみえてくるとよかつたと思つてゐるのですが、行つた時にはミレー、それから暫くたつてピサロ、そして、セザンヌ、それで帰つてきました。(後略)

(答)

秋櫻子は安井が「このやうに最も敬服したのはセザンヌであつたらしい」⁽⁴¹⁾としてゐる。また「巴里の縁日」⁽⁴²⁾が描かれた頃の安井は「ミレーやピサロの感化を経て、すでにセザンヌの偉大さに開眼し、その影響を強く宿しはじめていた」⁽⁴³⁾であり「安井がレアリスムという場合、いつもその根柢にセザンヌの唱えたレアリザッションという考えを意識していたらしいことは、まず見逃せないところであらう。というのは彼が足かけ八年にわたるヨーロッパ留学⁽⁴⁴⁾の後半期に、もつとも強く共鳴し

たのは他ならぬセザンヌの画風やその造形思想についてなのだし、それからの感化は、生涯彼の念頭から離れなかつた」⁽⁴⁵⁾と記している。

セザンヌが終生描き続けたサント・ヴィクトワール山は南仏ブーシエ・デュ・ローヌ県からヴァール県にかけて約十八軒にわたつて連なり最高一〇一米の山稜である。セザンヌがこの山を最初に描いたのは三十一歳の時、一八七〇年の「サント・ヴィクトワール山と切り通し」とされており、最晩年の十年間だけでも一〇〇点以上の作品を描いている。その向うには美しいアルプスが望め、気候がよければ地中海も見ることが出来る。⁽⁴⁶⁾安井がフランスに留学した時期の後半にセザンヌに特に傾倒しその足跡を追つた事実⁽⁴⁷⁾を考え合わせると、秋櫻子が一水会の展覧会の壁に掛けられた安井の油彩の彼方に観ていたものはセザンヌの愛した風景でもあつた。

以上のように秋櫻子は一高時代に読んだ小島烏水の『日本アルプス』により山岳への関心が芽生え、後に窪田空穂に師事しその日本アルプス詠を読むことで、文章ではなく短詩でもそのすばらしさを表現し得ることに驚愕しつつ、その地への憧憬をますます深めていった。それと並行して絵画好きであつたことから知つた安井曾太郎の画業を介してセザンヌの風景を愛しアルプスの空気を感じとつていた。つまり秋櫻子が愛した日本アルプスなどの山岳は西洋の匂い、いわば西洋化された風景であつた。

四 秋櫻子の乗鞍岳

それでは秋櫻子は「日本アルプス」などの山岳をどのように作品化したのであろうか。山岳について秋櫻子は、

山岳俳句家の第一の資格は、多くの山岳に登った経験を有することであるが、少なくとも三千米級の山を五つは征服していなければいけないと思う。低い山に登ったのでは山と真剣に立向うこともできないし、その真剣に立向かうことによつて山が示してくれる心にも触れ得ないわけだ。⁽⁴⁸⁾

と山岳を詠む姿勢、資格について述べている。「三千米級の山」というと富士山（三七七五米）、御嶽山（三〇六七米）という二つの巨大な独立峰を除き、北岳（三一九三米）、間ノ岳（三二八九米）、悪沢岳（三二四一米）、赤石岳（三二二〇米）、荒川中岳（三〇八三米）、西農鳥岳（三〇五一米）、塩見岳（三〇四六米）、仙丈ヶ岳（三〇三三米）、聖岳（三〇一三米）の南アルプス山系九座と奥穂高岳（三一九〇米）、槍ヶ岳（三二八〇米）、涸沢岳（三一一〇米）、北穂高岳（三〇六米）、大喰岳（三二〇一米）、前穂高岳（三〇九〇米）、中岳（三〇八四米）、南岳（三〇三二米）、乗鞍岳（三〇二五米）、立山（三〇一五米）の北アルプス山系十座の合計二十一座が標高三千米を越える山岳であり、これに僅か一米足りない北アルプス山系の剣岳（二九九九米）を加えた二十二座が当たる。⁽⁴⁹⁾そして二十二座の内、二十座が南北アルプス山系に属することにより、秋櫻子

がいう「三千米級の山」とは日本アルプスをほぼ指していると理解してよい。さらに自らが登った二千米内外の山の体験を通して、

だから、二千米内外の山に登るのは山岳登攀でなく、そこで詠まれた句も、山岳俳句と名付けることができないと思ふ。

さらに大菩薩嶺に登ったとき眺めた南アルプスの山々を引合いに出し、

この景色を詠んだところで、本当の山岳俳句にはならないであろう。やはり、僕の登った大菩薩嶺そのものが、三千米近くなければ駄目なのである

とし、自身の山岳俳句家としての資格を「遺憾ながら無資格」と述べた上で、俳壇が秋櫻子を「山岳俳句家」の一人として認めることに対して、「そこで僕は経験の乏しさを気にしながら⁽⁵⁰⁾も、喜んでこの名称を頂戴しようと思う。僕をしてこの資格を得せしめたものは、おそらく昨年発表した乗鞍岳の連作であろう。」⁽⁵¹⁾と登攀者と俳人とが一致した作品として「昨年発表した乗鞍岳の連作」⁽⁵²⁾を挙げている。

秋櫻子は昭和十年八月乗鞍岳に登攀したが、その行程を「馬酔木」に掲載している。⁽⁵³⁾乗鞍岳を「その山容が偉大であり而

も美しいからだ」としながらも「足の弱い僕」が鈴蘭小屋から「冷泉小屋までが大変だといふけれど」「大に心丈夫であつた」のは次の師の言葉に拠る。

今年の五月早大の講演会で空穂先生に御めにかゝつたとき／「乗鞍はまるで草原を行くやうなものですよ。それに実に綺麗な山だから、是非登つておいでなさい」と、先生がすゝめ且つ保證して下さつたからだ。

秋櫻子の乗鞍岳登山の根柢には空穂のそこでの作品があつた。秋櫻子の俳句が、『日本アルプス』などを愛読した空穂の短歌の上に成り立っていたのである。

さて、乗鞍岳の連作は三十三句であるが、これは第五句集『秋苑』に全て収められている。

『秋苑』は昭和十年九月十日、龍星閣より刊行され『新樹』後の五二五句から成る。秋櫻子は『葛飾』第三版⁽⁵⁴⁾の自序で、

私の家集として『新樹』『秋苑』よりも『葛飾』がいいという評判を近ごろしばしば耳にする。これは著者にとつてはやや意外なことである。著者自身おのが家集の評価を公にするのは慎みをわすれた態度であるが、しばらくそれを許されるなら著者は『秋苑』が第一、『葛飾』が第二、『新樹』が第三に位すると思つている。(中略)この二集に比べると『秋苑』には安心と共に緊張がある。という意味は自

分の考えを信じ傍目もふらず努力し得たということである。

この自序が書かれた昭和十一年の時点ではまだ第五句集までしか上梓されていないので、その範囲内での感想であるが、当時、秋櫻子は連作に熟中していた時期でもあり、『定型俳句陣』⁽⁵⁵⁾に「連作俳句の設計図」を著している。「設計図」という言葉に、いかにも秋櫻子の絵画好きが窺える。

一句では現はすことのできぬ材料に出会ふこともあり、また、一句で表はすよりも連作で現はす方がよいと思ふ材料に出会うこともある。(中略)そこで先づそれ等を完全に活かし得る心の用意をなし、一聯の設計図を作り、それから句を作つて行くのである。(「連作俳句の設計図」)

「一句では現はすことのできぬ」(傍線筆者、以下同)材料は「連作で現はす方がよい」という秋櫻子の表現は明らかに絵画的な視点から述べられている。つまり「一句で表はす」ということではない。この秋櫻子の言葉は一句では作者の見た素材を絵画のごとく十全に読者の視野に再現することができないという考えに基づく。俳句という文字を使用した表現でありながらも、そこに調べや豊かな色彩を加味することで、あたかも読者は絵画を観る錯覚に陥ることが肝要であると説く。後年、秋櫻子は連作俳句が無季俳句を生ずる遠因になる⁽⁵⁶⁾とのことで、これを

排している。しかし、『秋苑』を編んだ時点ではまだこうした「設計図」に従い秋櫻子は素材を選択し組み立てていた。

乗鞍岳

番所原をゆけば乗鞍岳の山容あきらかに見ゆ

乗鞍岳雪さやかなり桑の上に

飛驒に湧く夏雲嶺を越えきたる

雲の影落ちて夏山を深くしぬ

万尺の夏山にむかひ径つゞけり

鈴蘭小屋

蕎麦を植ゑその花咲かせ翁住む

雪溪をあふげばそこに天せまる

雪溪は夏日照るさへさびしかり

偃松帯ちかく

穂高岳雷雲の上に巖そびゆ

穂高見て深山の蘭を敷きいこふ

夏山を統べて槍ヶ岳真蒼なり

雪溪をのぼる

攀ちがたき雪溪と見れば霧かゝる

雪溪をかきくらしゆく霧絶えず

雪溪に径はありけり踏みゆけば

なほ高き雪溪が霧のひまに見ゆ

肩の小屋にて

天騒ぎ摩利支天岳に雷おこる

摩利支天雷おさまりて霧吐ける
嶺うばふ霧たちまちに海をなせり
雪溪をかなしと見たり夜もひかる
霧さむく炉に偃松を焚きてねむる

夜明の疾風

偃松を走せくたる霧の瀬を見たり

霧疾しはくさんいちげひた靡き

濃むらさき岩桔梗咲けり霧の岨

頂上登攀、頂上は剣が峰を主峰とし、朝日岳、摩利支天岳、

四つ岳等に分かる。朝日岳にて

岩に凭り霧にむせびて言をわする

岩をふみ岩をかき消す霧をよづ

剣ヶ峰頂上

三角標霧立ちのぼり渦巻けり

三つ立たす霧の祠のしづくせり

白米をあげし宝前を霧ながる

霧凝りて三柱の神ぬれたまふ

飛驒の国をうつるとなして霧湧けり

三角標霧に朽ちたり飛驒の霧に

下山

追ひせまる霧や雪溪をすべり下る

霧の海木曾駒ヶ岳を浮べたり

霧の沢白樺みだれ潰えたる

連作の構成は極めて簡略であり、「馬酔木」に発表した紀行文「乗鞍岳」⁽⁵⁷⁾に記すように、「大野川をすぎ、番所原といふ所へ出ると乗鞍岳が全貌をあらはした。朝曇はしつかり晴れて、山には一抹の雲もかゝつてゐない。剣ヶ峰が真正面に聳え、その下に幾條かの雪渓が実に美しい」という、雪渓にさしかかった作者一行の紀行文中の姿を句に引き写すことから始まり、その行程を順次、句にしつつ「雪渓をすべりながら下りた。はるか下で長男が転んで笑つてゐるのがきこえる。正面の霧がうすくなつて、木曾駒ヶ岳が雄大な姿をあらはした」という下山の様子を描写した句で終わっている。作者のただならぬ感動は連作句中を貫いているが、特に、

万尺の夏山にむかひ徑つゞけり

雪渓をあふげばそこに天せまる

夏山を統べて槍ヶ岳真蒼なり

天騒ぎ摩利支天岳に雷おこる

雪渓をかなしと見たり夜もひかる

これらの張つた調べや透徹した色彩感に強く出ている。

この連作で作者の心情がもつとも強く出た部分は「剣ヶ峰頂上」の六句であろう。ここには鳥水や空穂の作品——つまり西洋の「アルプス」を日本の枠組みに当て嵌めてしまった文章や短歌——に触れ、かつ安井曾太郎を介してセザンヌの洋画の力ンパスの中の山岳に親しみ、それを日本の山岳に求めようとし

た秋櫻子にとつて、はじめて三千米級の山岳を制覇したという思いがもつとも色濃く滲む。それはこの部分の六句の最初と最後に「三角標」を据えたことでも想像できる。「三角標」とは三角測量の基準点である三角点を示すもので、明治四年、工部省に測量司が設置されイギリス人、コーリン・アレクサンダー・マクヴェイン (C.A. McVean) の指導を受け我が国に導入されたが、すでに海外ではフランス、ドイツ、アメリカなどでは使用されていた。⁽⁵⁸⁾乗鞍岳の三角標とは最標高地点三〇二六米の標示そのものである。それを強調することは、いかに秋櫻子が憧れの乗鞍岳を山頂に立ったことに感動しているかということの表れでもある。そしてその興奮に挟まれる形で山頂に祀られる神を描くのである。

霧深い朝で、展望は全く利かなかつたが、頂上には小さな祠が三つ立ち、それがすつかり霧にぬれて静浄な感じであつた。私はしばらくそこに立つて、霧のはれるのを待つていたが、霧は遂にはれず、その代はりに、この連作の構想が頭に浮かんだのであつた。／私はまづ三角標と霧とを使つて、第一句と終はりの句とを仕上げやうと思つた。そうして第一句は自然に第二句第二句以下へつづくやうな調べをもち、終はりの句は全体を受けとめて、しつかりと根を下ろしたように据わるものにしたと考へた。／さう思ふと、割合にすらすら第一句ができ、つづいて終はりの句もできた。このやうに短時間に詠み得たのは、そのときに

景から受けた感動がつかつたからである。つづいて私は眼の前にあるただ一つの題材の祠を詠んだ。殊に宝前にあげられた白米の霧にぬれたさまが、私の眼をつよく惹きつけたので、これを中心に置きたいものだと思つた。(「連作俳句」)⁽⁵⁹⁾

この作者自身の解説に拠れば、秋櫻子が山頂でもつとも惹きつけられたものは、「祠」でありそこに供えられていた「白米の霧にぬれたさま」であつた。乗鞍岳の山頂には飛驒側に乗鞍本宮奥宮が建ち背中合わせの信州方向に朝日権現の祠が祀られているので秋櫻子が心惹かれた「祠」とは朝日権現を指す。秋櫻子は神道であるので、より乗鞍本宮奥宮に心を寄せそうなるのであるが、朝日権現に感じるのは、それが信州を向いていることと無縁ではあるまい。信州は窪田空穂の生誕地でもあり、紀行文「乗鞍岳」⁽⁶⁰⁾の冒頭に、

北アルプスの山はひとつも見えぬが、これは暫らくすると晴れ渡りさうな気配で、霧を通してうすい朝日の光が稲田の上にさしてゐるのであつた。／窪田空穂先生の御郷里はあの辺だと、石橋君(筆者註——石橋辰之助)に指さして教えてゐるうちに島々⁽⁶¹⁾に着いた。

と、乗鞍岳に着く途次に解説するほどであつた。師を偲びつつ詠る「祠」にあるのは「白米」であり、しかも「霧にぬれて」

いる。稲作は日本文化の多元性をもたらしたものであり、霧は古事記や日本書紀で神々の誕生と深い関係があるとされている。⁽⁶²⁾

以上のように、この六句は連作の山場をなすものであるが、その「設計図」は、乗鞍岳、その頂点、三角標においてですら日本を象徴する事物を西洋の技術が包み込むような構図となつており、日本的だと思われていた事物が実はすでに西洋化されつつある、または、その環境におかれているということの実証でもあつた。

この連作三十三句が作られていた時期は秋櫻子にとつて重要な出来事が起きている。それは山口誓子の「馬酔木」参加である。秋櫻子は「ホトトギス」同人であつた山口誓子の協力を得るべく大阪馬酔木会俳句大会⁽⁶³⁾出席。そのまま山口誓子に会い五月号よりの「馬酔木」参加を決定づけている。同号は誓子の「射手の挨拶」と秋櫻子の「喜び迎へて」を併記し対外的にも誓子の加盟を宣言した。さらに、八月号からは連作俳句欄として「深青集」を新設し、積極的に連作俳句に取り組んでいた。その第一回の締切月である八月に秋櫻子は憧憬の乗鞍岳登攀を果たしている。

五 乗鞍岳の行方

秋櫻子が「ホトトギス」を離脱した時⁽⁶⁴⁾、世間の大半は、これで秋櫻子の命運も尽きたと噂し、秋櫻子自身も門下に「ホト

トギス」離脱後の会員数を問われ「二百残れば上等だと思ふ」と答えている。⁽⁶⁹⁾当時の会員数は五百五十名前後であるので、主宰者としても三分の一近くまで減少する覚悟であった。幸いにしてこの予想は裏切られ順調に部数を伸ばしたのであるが、次の問題はいかにして自身の理念の裾野を広めて行くかということになった。

四Sのひとりとして秋櫻子に比較的近い作風を持っていた山口誓子は、虚子をして『凍港』⁽⁷⁰⁾の序で「其俳句にしても従来の俳句の思ひも及ばなかつたところに指をそめ、所謂辺境に銚を進むる概がある。最も理論の正確精緻なる点に於て、今の俳句界に殆ど独歩の観がある。／＼（中略）「凍港」三、百章を読む人は（中略）俳句界に歩を駐めて、長く征夷大將軍たらんとするものとも看取するであらう。又俳句は如何に辺塞に武を行つても尚且つ花鳥諷詠詩であるといふことも諒解するであらう」と言わしめている。虚子は誓子の素材の開拓に期待しつつも、それが自らの唱える「花鳥諷詠」を逸脱してはいけないものだと、この序文で釘を刺したのではないか。虚子は誓子こそいち早く自身の膝下を去るといふ不安があったとも考えられる。誓子が「馬酔木」に参加した際、同誌上に書いた「射手の挨拶」（昭和十年五月号）の中で「所謂新興俳句運動は、既に堤を決して流奔し、俳壇の旧山河は悉くその氾濫の下に没し去つた。／＼俳壇のこの新しい沖積土に標柱を立つるものは、二つの結社「馬酔木」と「天の川」⁽⁷¹⁾とである」としながら、自身の姿勢について問われたなら、その人に逆に自分はどちらに向いているか聞き返

してみよう、さすれば、その人は「あなたの作品は、どちらかと云へば、「天の川」を志向してゐるんぢやないでせうか」——これは輿論と一致してゐる」と述べている。すでに「天の川」は昭和九年五月より無季俳句を容認していた。つまり、多くの俳誌の読者達は、誓子は秋櫻子よりもっと大きく虚子を逸脱して、「天の川」に参画するものと想像していた。こういう雰囲気は秋櫻子も気付いていたであらうし、何時かは共に行動をすべき俳人だと考えていた。果たして誓子は「馬酔木」を選んだが、その理由は不明瞭な点が多く、秋櫻子と誓子の間に隠密の遣り取りがあったのではないかと⁽⁷²⁾とも言われている。「射手の挨拶」でさらに誓子は「時には秋櫻子の撃てない標的を射抜くかも知れない。唐突な比喻だけれど僕はピカソやマチスのやうにはなく、ブラックのやうにありたい」と結んでいる。秋櫻子をピカソやマチスに喩えるのは無理があるが、自らをブラックになぞるのは、モンタージュ論⁽⁷³⁾の推進をこの段階ですでに念頭に置いてのことには違いない。松井利彦が述べるようにこの手法は最初は連作俳句に対して考えられたものであり⁽⁷⁴⁾それだからこそ、秋櫻子は誓子が必要としたのである。

一方、誓子を迎える秋櫻子は「喜び迎えて」という一文を同号に載せている。

誓子君と私は三年あまりの間離れた俳句陣中（筆者註）——

秋櫻子はすでに「ホトトギス」を離脱して「馬酔木」を主宰し、誓子はまた「ホトトギス」同人であった）にゐた。（中略）／＼互の所属

陣を距つる山が険しさを加へ、雲霧ふかく籠めて彼方を望見し得ざるときも、なほ私の信念はゆるがなかつた。私は雲霧を裂いて閃めく友の業績を注視し、邁進してやまざる創造力と、先鋭群を抜く論評に敬意を払つてゐた。／友もまた山の彼方より我等の仕事を凝視し、折々は山彦に托して好意ある批判をつたへてくれた。

この山岳に倣つた秋櫻子と誓子の位置付けは、連作俳句という場を考えたとき、すでに、この三ヶ月後に予定されていた乗鞍岳登攀を念頭に置いての歓迎の辞であつたと考えられる。つまり「乗鞍岳」は秋櫻子にとつて誓子と共に連作俳句を実践する象徴の場でもあつた。

乗鞍岳の連作三十三句で詠み込まれた西洋化されつつある日本的な素材——日本アルプスを巡る紀行文や短歌あるいは安井曾太郎を介したセザンヌのような風景——秋櫻子は「風景句といふものは、そのなかに絵画的要素を多分に含む句である。(中略)だから、風景句の作者は絵画から非常な影響を受ける。それだけに常に心がけて絵画を見、勉強することを心がけなければならぬ。たとへば或る渓谷の景を見て、さほどの感動を受けなかつたのが、その景を描いた絵画を見た後、再遊すると非常に感動を受けることがある。これなどは絵画によつて風景を見る眼を開かれたので、よき影響である」⁽⁷⁵⁾と主張し、眼前の光景と絵画の中の世界との、いうなれば風景の交換を積極的に推し進め、晩年、外出が叶わぬようになってからは、「胸中山水」

という造語に集約させた——そういう風景を「馬酔木」は目指すということも誓子に例示したものと思われる。しかしそれは、従来の俳句の古めかしいイメージを一新したものの、秋櫻子が西洋的な素材を俳句に導入し、これからの新しい日本的な俳句を構築したと信じていたものが実は単に西洋化された日本の風景の描写にすぎなかつたという結果に至つた。

河田和子は保田與重郎著『近代の終焉』所収の「風景観について」(原題「新しき風景観」、報道写真、昭和十六年七月)の左記の箇所を挙げ論を進めている。

さて日本の風景観は大体が綿密な文明の方へ発展して行つたが、文明開化以後に一べんに墮落したのである。この時代の日本文化の文明の相が、すべて欧米文化の植民地地帯を作ることに汲々としてゐたやうに、日本の風景として紹介されたものはみな外国風景の断片であつた。西洋風景に似たものを国内にみつけると、これが世界的であると喜んだのである。その反面でことさら日本的なものをやはり毛唐の目で見ようとした。新しく移入された風景観をもつて己を反省し、日本独自の風景を新しい見所から見るといつたことさへできなかつた。しかもこれは文化一般の様式である。

河田は「保田與重郎の文明開化批判を考察するにあつて着目したいのは、彼の風景観である。風景の見方もまた西洋から

輸入され、それは日本の風景観に変化を及ぼした。保田はそのことを問題とし、この時期、一連の風景論を発表する」としてこの論を援用し、「保田は、「西洋風景の断片」を日本に発見して「世界的と」するところに風景観の墮落を見てい」て「西洋文明を「翻訳」、「編輯がへ」する「文明開化の理論」によつて、「西洋風景の断片」を見出すことに終始し、日本特有の風景を見出せなくなっていることが「墮落」なのである」と結論付けている。⁽⁷⁶⁾

秋櫻子が風景連作俳句に求めようとしたもの、それは保田與重郎の言葉を借りれば「みな外国風景の断片であ」り、「乗鞍岳のゼザンヌばかりと云われた山岳俳句」⁽⁷⁷⁾という讚辞自体も、西洋の風景の的確な翻訳者であるということの意味しているにすぎなかつた。

高浜虚子は「不易の方に重きを置く」⁽⁷⁸⁾にして、

兎に角俳句は古典的のもので、其程敏感に時代の要求を容れるものではないと思ふ。近代的の影響を受ければ受ける程自滅に陥つて了ふ、俳句は近代的でないところに生命があるんです。

このように俳句が「近代」に近づくことの危険性を説いた。

虚子が秋櫻子の『葛飾』を読んだ感想を告げる場面が『高濱虚子 並びに周囲の作者達』⁽⁷⁹⁾にある。

「葛飾の春の部だけをきのふ読みました。その感想をいひますと……」こゝで一寸言葉をきつたのち、「たつたあれだけのものかと思ひました」と言つた。(中略)／虚子はまたしばらく黙つてゐてから／「あなた方の句は、一時どんどん進んで、どう発展するかわからぬやうに見えましたがこの頃ではもう底が見えたという感じですよ」と言つた。

その後の秋櫻子の「ホトトギス」離脱は個人的感情の纏れや写生における作者の主観の扱い方の差異に原因があつた⁽⁸¹⁾とされているが、実は近代の認識に大きな食い違いがあつた——言い換えれば虚子は秋櫻子俳句の中の近代を否定した——ためであつた。乗鞍岳はその象徴として無言のまま向き合つてゐるふたりの間に聳えている。

【注記】

1 松尾芭蕉(一六四四～一六九四)は「奥の細道」の途次、元禄二年(一六八九年)六月三日から十日まで出羽三山へ滞在した。五日に羽黒山、八日に月山、湯殿山と三霊山を踏破した。下つて坊に帰つた芭蕉は「涼風やほの三か月の羽黒山」(雲の峯いくつ崩れて月の山)「かたらぬゆとのにぬらす袂かな」の句を阿闍梨の求めによって短冊に書いている。

2 『現代俳句大辞典』(明治書院 昭和五十五年九月)

3 瓜生卓造『日本山岳文学史』(東京新聞出版局 昭和五十四年一月)

4 河東碧梧桐は明治六年、愛媛県千舟町に生まれる。同級の高浜虚子とともに正岡子規より俳句を学ぶ。三十五年子規没後、「日本」の俳句欄選者

となる。三十八年ごろより「新傾向俳句」を提唱し全国を巡回し紀行文として上信越、東北、北海道の旅を四十三年に『三千里』として、西国への周遊を大正三年『統三千里』として出版した。碧梧桐はさらに僻地や山岳などに分け入った。立山、白山、白馬、槍ヶ岳などの山岳に攀じ、また冬の陸奥や北海道に足を伸ばしている。『雪線踏破七日記程』と『日本アルプス縦走記』は四年に長谷川如是閑、一戸直蔵と針の木から槍ヶ岳を縦走したの時の紀行である。同年、荻原井泉水の「層雲」を離れ「海紅」を創刊主宰するも後に中塚一碧樓に譲つている。昭和八年、還暦祝賀会で俳壇引退を表明。十二年に六十五歳で永眠した。

5 明治四十二年五月二日、東京都下谷生まれ。別号竹秋子。開成中学中退後、安田工業学校電気科を卒業。神田日活館、新宿帝都座映画等の照明係を経て、戦後は日本映画社製作課長となる。昭和六年には秋櫻子に従つて「ホトトギス」を離れ、「馬酔木」に参加。八年「馬酔木」同人となる。特に山岳俳句で新局面を開いたが十二年、「馬酔木」を脱会し新興俳句運動に参加。杉村聖林子と共に「荒男」を創刊し無季俳句を提唱。十三年には高屋窓秋と共に「京大俳句」に参加。さらに翌年新興俳句の総合誌「天香」を西東三鬼、三谷昭らと創刊、雑誌の選者となる。十五年の新興俳句弾圧事件で「京大俳句」同人等と檢舉され「天香」は三号で終刊、自らも作句中断するに至る。戦後は「新俳句人連盟」に参加。「俳句人」の編集に従事するも二十八年八月二十一日、急性結核にて東京杉並河北病院で死去。

6 明治二十五年十月九日東京神田に生まれる。本名豊。東京帝国大学医学部卒。昭和医専教授（産婦人科）、宮内省待医寮御用掛。俳句は大正八年大学在学中に松根東洋城の「浜柿」に最初参加するも、同年、高浜虚

子の「ホトトギス」に移った。また、翌年には宇都野研主宰の「朝の光」にて短歌を学び窪田空穂に約二年間師事した。空穂には終生私淑している。十一年、佐々木綾華の「破魔弓」同人となる。（秋櫻子は昭和三年「破魔弓」を「馬酔木」と改題した）十三年、「ホトトギス」課題句選者、昭和四年、同志同人となる。後に「ホトトギス」では山口誓子、高野素十、阿波野青畝とともに四Sとして黄金期を成したが、作品における作者の主観の在り方について虚子の主張と相容れぬところとなり、昭和六年、主宰する「馬酔木」に「自然の真と文芸上の真」を発表して「ホトトギス」を離脱した。俳人協会会長を長く務めた。日本芸術院会員。五十六年七月十七日、急性心不全にて逝去。享年八十八。業績は『水原秋櫻子全集 二十一卷』（講談社）に収められている。

7 注2参照

8 刊行順に『南風』（大正八年〜十五年（収録年、以下同）京鹿子発行所 大正十五年十二月五日）、『葛飾』（大正八年〜昭和五年 馬酔木発行所 昭和五年四月一日）、『秋櫻子句集』（昭和五年〜昭和六年 素人社書屋 昭和六年十二月十五日）、『新樹』（昭和六年〜八年 交蘭社 昭和六年十二月十五日）、『秋苑』（昭和八年〜十年 龍星閣 昭和十年九月十日）、『浮葉抄』（大正十四年〜昭和十年 改造社 昭和十二年六月十九日）、『岩礁』（昭和十年〜十二年 沙羅書店 昭和十二年十二月十五日）、『蘆刈』（昭和十三年〜十四年 河出書房 昭和十四年十二月二十日）、『古鏡』（昭和十五年〜十六年 甲鳥書林 昭和十七年二月十一日）、『雪蘆抄』（大正十四年〜昭和十七年 石原求龍堂 昭和十七年七月二十日）、『磐梯』（昭和十七年〜十八年 甲鳥書林 昭和十八年十一月二十日）、『重陽』（昭和十八年〜二十二年 細川書店 昭和二十三年四月二十五日）、『梅下抄』（昭

- 和十八年～二十三年 武蔵野書房 昭和二十三年六月十日)、『雷林』(昭和二十三年～二十五年 目黒書店 昭和二十五年十二月十五日)、『残鐘』(昭和二十五年～二十七年 竹頭社 昭和二十七年十二月一日)、『帰心』(昭和二十七年～二十九年 浪珩堂 昭和二十九年十二月十五日)、『玄魚』(昭和二十九年～三十一年 近藤書店 昭和三十一年五月十日)、『蓬壺』(昭和三十一年～三十三年 近藤書店 昭和三十四年四月二十五日)、『旅愁』(昭和三十四年～三十五年 浪珩洞 昭和三十六年十月)、『晩華』(昭和三十六年～三十八年 角川書店 昭和三十九年十月三十日)、『殉教』(昭和三十九年～四十二年 求龍堂 昭和四十四年二月二十五日)、『緑雲』(昭和四十三年～四十六年 東京美術 昭和四十六年九月三十日)、『餘生』(昭和四十六年～四十九年 求龍堂 昭和五十二年十月九日)、『蘆雁』(昭和五十年～五十四年 東京美術 昭和五十四年十月九日)、『うたげ』(遺句集) (昭和五十四年～五十六年 東京美術 昭和六十一年五月)
- 9 前橋市北方の複式火山。最高峰の黒^{くろ}^び^ま山は標高一八二八メートル。榛名・妙義とともに上毛三山の一つ。
- 10 『定本現代俳句』(角川書店 平成十年)
- 11 『自選自解 水原秋櫻子句集』(白鳳堂 昭和四十三年五月)
- 12 『俳句のたのしさ』(講談社現代新書 昭和五十一年六月)
- 13 『水原秋櫻子全集 第二十一巻』(講談社 昭和五十四年六月)
- 14 水原秋櫻子「空穂先生と私」(角川書店 「短歌」 昭和三十年十二月号 七十一～七十四頁)
- 15 注14参照
- 16 『俳句のモダン』(五柳書院 平成十四年十二月)
- 17 『私の履歴書 文化人』第二巻(日本経済新聞社 昭和五十八年十一月)
- 18 倉橋幸村『水原秋櫻子』(角川書店 昭和六十二年十二月 八十～一〇〇頁)
- 19 「秋櫻子と空穂」(『馬酔木』 昭和六十一年八月号 五十～五十三頁)
- 20 注14参照
- 21 森川多佳子『窪田空穂の歌』(角川学芸出版 平成二十年六月 一〇六頁)
- 22 沢口美美「流麗な調べにのる青春の傷みと憧れ」(『短歌』 角川書店 昭和六十三年十一月号 一〇六頁)
- 23 大岡信『窪田空穂論』(岩波書店 昭和六十二年一月)
- 24 窪田空穂「明治三十七年代の就職活動」(『槻の木』 昭和九年一月号)
- 25 『窪田空穂全集』(角川書店 昭和四十三年一月)
- 26 『コンサイス日本山名辞典』(三省堂 昭和五十四年)
- 27 注23参照
- 28 「自歌自釈」(『窪田空穂全集』第七巻 角川書店 昭和四十年十月)
- 29 北原由夫「歌人窪田空穂における山岳への憧憬とその志向」(駒木原国文) 平成八年三月)
- 30 窪田空穂「山の童」(『窪田空穂全集』第五巻 角川書店 昭和四十一年五月 底本は「山比古」 明治三十六年五月)
- 31 「世界的な……アルプス的美観 小島鳥水談」(『東京日日新聞』 昭和二年七月六日)
- 32 河田和子『戦時下の文学と(日本のなもの)―横光利一と保田與重郎―』(花書院 二〇〇九年三月二十日 一六五頁)
- 33 小島鳥水「上高地風景保護論」(小島鳥水 『山岳紀行文集 日本アルプス』岩波文庫 岩波書店 平成四年七月十六日 底本は「信濃毎日新聞」)

大正二年八月三日四日)

- 34 注13参照
- 35 水原秋櫻子『自選自解 水原秋櫻子句集』(白鳳堂 昭和四十三年五月二十日)
- 36 水原秋櫻子は昭和二十年四月より杉並区西荻窪に新居が建つ二十九年十一月まで八王子に疎開している。
- 37 注35参照
- 38 注35参照
- 39 水原秋櫻子『安井曾太郎』(石原求龍堂 昭和十九年一月二十日)
- 40 「アトリエ」(アトリエ社 昭和十年三月号)
- 41 注39参照
- 42 一九二二年作 カンヴァス 油彩
- 43 富山秀男「安井曾太郎作品解説」(『現代日本美術全集10』集英社 一九七二年十一月一日)
- 44 安井曾太郎は一九〇七年六月、十九歳の時より一九一四年十一月二十六歳で京都の自宅に戻るまでフランスに滞在し、アカデミー・ジュリアンに入学するなど研鑽に努めた。
- 45 富山秀男「安井曾太郎の生涯と芸術」(注43参照)
- 46 里見勝蔵『セザンヌの研究』(アトリエ出版社 昭和二十八年八月)
- 47 「みづゑ 安井曾太郎追悼号」(美術出版社 昭和三十一年二月)
- 48 「山岳俳句」(『水原秋櫻子全集 第六巻』講談社 昭和五十三年八月二九一〜二九九頁 底本は『波の群』馬酔木発行所 昭和十一年)
- 49 『山岳辞典』(山と溪谷社 昭和三十五年)
- 50 秋櫻子には穂高の作品もあるが、奥穂高岳、北穂高岳、前穂高岳のいずれの山頂にも立っていない。昭和十二年には「望岳行」との隨筆を『蘆の花』(第一書房 昭和十二年一月)に発表している。
- 51 注48参照
- 52 秋櫻子は昭和十年八月乗鞍岳に登攀し三十三句を発表、九月に上梓した『秋苑』に収録している。
- 53 「馬酔木」昭和十年十月号 七十五〜八十頁
- 54 沙羅書店 昭和十一年
- 55 龍星閣 昭和九年
- 56 「無季俳句を排す」(『馬酔木』昭和十一年三月号〜十二月号)
- 57 注53参照
- 58 注49参照
- 59 『俳句の本質』 蘭交社 昭和八年一月
- 60 注53参照
- 61 長野県東筑摩郡波田町(現松本市波田) 前測にあつた松本電気鉄道(現アルピコ交通) 上高地線の駅。
- 62 『風土と文化 日本民俗文化体系1』(小学館 昭和六十一年五月)
- 63 神野志隆光『古事記と日本書紀 「天皇神話の歴史」』(講談社 講談社現代新書 平成十一年一月)
- 64 明治三十四年、京都市に生まれる。京都府立第一中学、第三高等学校を経て東京帝国法学部入学。三高の学友たつた日野草城の誘いで「ホトトギス」に参加し大正十一年高浜虚子に出会い師事。東大俳句会で秋櫻子、山口青邨、高野素十らと出会う。帝大卒業後は大阪住友合資会社本社に入社するも胸部疾患のため昭和十七年退社。昭和三年浅井梅子と結婚、翌年「ホトトギス」同人となる。秋櫻子、素十、阿波野青畝とともに「四

S」といわれ黄金期を迎えた。十年「ホトトギス」を離れ、「馬酔木」参加。モンタージュ論などの新しい手法を俳句に加えた。二十三年、西東三鬼らと「天狼」創刊、主宰する。六十二年芸術院賞受賞。平成四年文化功労者。六年死去。享年九十二歳。句集に『凍港』『黄旗』『七曜』『激浪』『遠星』など。

65 昭和十年四月三日午後一時より大阪基督教青年会館（大阪市西区土佐堀二丁目）にて南風発行所主催により行われた。出句は事前に三句、会費五拾銭（小為替）とともに集められた。大会後に懇親会が催された。

66 秋櫻子は石田波郷を伴つて三月三十一日夜行で東京駅を発し四月一日早朝、奈良着。「東大寺、春日神社、博物館、新薬師寺、秋篠寺、西大寺、東招提寺、薬師寺等を見て少憩、さらに法隆寺、中宮寺、夢殿を見て、夕方大阪に著いた。南風の人々に迎へていたゞき、堂ビルホテルに投宿、その夜誓子氏を訪ねた」（『編輯後記』『馬酔木』昭和十年五月号）と記している。

67 「馬酔木」八月号の「原稿募集」欄に山口誓子選として「連作一篇五句に限る。必ず表題を附し、本号添付の投稿用紙を用ふべし。締切 八月五日」の記載あり。

68 昭和六年十月

69 村山古郷『昭和俳壇史』（角川書店 昭和六十年十月）

70 山口誓子の第一句集。（素人社書屋 昭和七年一月）

71 大正七年七月、吉岡禅寺洞が内本紅蓼、高崎鳥城、岩田紫雲郎、清原枡童と福岡市にて創刊。長谷川零余子が選者を務めたが「枯野」創刊にと

もない、九年十一月より禅寺洞が選者となる。昭和九年五月号より無季俳句を容認、十年四月号より無季俳句投句欄「心花集」を設け推進した。翌年、禅寺洞は「ホトトギス」同人を除名された。三十六年三月廃刊。

72 注69参照

73 昭和六年、誓子は映画理論であったモンタージュ論を俳句の連作に応用。八年には一句の中においても眼前の個別の素材を組み合わせて構成することで別の世界を創造しようとするもので、「花鳥諷詠論における客観写生が人間の参加を極限したのに対し、「あるべき姿」を構成しようとする技法である」（松井利彦『現代俳句大辞典』）

74 注59参照

75 「風景句作者の言葉」（『蘆の花』第一書房 昭和十二年一月）

76 河田和子『戦時下の文学と（日本的なもの）——横光利一と保田與重郎——』（花書院 二〇〇九年三月二十日 一五八〜一五九頁）

77 『水原秋櫻子全集 第四卷』解題・堀口星眠（講談社 昭和五十三年二月 三五五頁）

78 高浜虚子『俳談』（中央出版協会 昭和十八年九月）

79 水原秋櫻子『高濱虚子 並びに周囲の作者達』（文藝春秋社 昭和二十七年一月）

80 注69参照

81 注2参照

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）

資料 水原秋櫻子の山岳俳句①

『葛飾』より『秋苑』まで

『葛飾』

大垂水峠の春

鶯や前山いよゝ雨の中

谷深くうぐいす鳴けり夕霞

鞆や春の山彦ほしいまゝ

杣が春谷杉藤を垂れたりや

機織や燕きたるといそしめり

雨ごもり燕巢に鳴く機屋かな

高嶺星子蚕飼の村は寝しづまり

飼屋の灯釣橋来れば木隠りぬ

峠より水走り来る飼屋かな

桑の芽や雪嶺のぞく峽の奥

大垂水峠の夏

岨高く雨雲ゆくや朴の花

朴の咲く淵にこだす機屋かな

梅雨晴や小村ありける峠口

峠路にひとつの家の牡丹かな

牡丹に崖の清水や山の宿

水蹴立て浅瀬をわたる鳴匠かな

◇

木曾御嶽

雷鳥もわれも吹き来し霧の中

飛騨平湯

蚊火消ゆや乗鞍岳に星ひとつ

赤城山 二句

夜の嶺に馬柵の見ゆなりほとゝぎす

牧草の丈なすまゝにほとゝぎす

霧降瀧 二句

山の日にコスモス咲けり瀧見茶屋

あな幽かひぐらし鳴けり瀧の空

軽井沢 二句

百合赤し夕立晴れし草の中

夜の雲に噴煙うつる新樹かな

上高地

焼岳のはだへの荒き新樹かな

木曾上松

羽拔鶏駆けて山馬車軋り出づ

赤城の秋

コスモスを離れし蝶に谿深し

水沼口

白樺に月照りつゝも馬柵の霧

山上

月明や山彦湖をかへし来る

二の湖に鷹まひすめる紅葉かな

啄木鳥にさめたる暁の木精かな

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

雲海

雲海や鷹のまひる嶺ひとつ

雲海の凝りて月あり山紅葉

龍胆や月雲海をのぼり来る

下山

奥紅葉端山芒にかくれぬる

渡り鳥四方に生るゝ端山かな

◇

上総清澄山

山霧にあせたる欄や蚊帳を干す

上高地

白樺に霧の宿への道しるべ

軽井沢

この原の桔梗の色や霧の中

連作 筑波山縁起

わだななかや鶉の鳥群るゝ島二つ

天霧らひ雄峰は立てり望の夜を

泉湧く女峰の萱の小春かな

国原や野火の走り火よもすがら

蚕の宮居端山霞に立てり見ゆ

『秋櫻子句集』

夏

焼岳のこよひも燃ゆる新樹かな
焼岳のけぶりを右に道をしえ

大岡龍男君と日本平に登る

中キヤンプの人とあへるのみ

秋

日光瀧淵 二句

倒れ木をちりばめてをり紅葉鮎
紅葉鮎湯灌の上に来て遊ぶ

戰場ヶ原 三句

鮎釣の径ほそぼく、葛紅葉

鮎釣のよぎる林の薄紅葉

草紅葉見るよしもなき霧となる

『新樹』

昭和七年

大垂水峠

溪の魚うぐひを売れり花のかげ
落の葉に尾鰭あまりぬ花うぐひ

山躑躅燃ゆれど山はひそかなる

ある家は鮠を飼ひをり見飽かなく

ある谷は木苺咲くよ露の上に

石老山

蛙塗のひそかに居りぬ朴の花

春蟬や松はこぞりて花となりぬ

まきめ
牧馬の郷

ひとつ鳴く蛙のひびく飼屋かな

山中雷雨にあふ

雨蛙鳴き競ふなり梭の音

いかづちのとどろく窓の梭の音

鳴きこたふ山家の鶏やはたゝ神

紫羅傘に嶺の雷雨の打ちきたる

避暑行

木曾路 四句

飼屋より旅あきうどの出できたる

木曾谷は葛咲かせたり瀬々の岩に

葛の風灌かゝるさまかはりけり

かなくが昼餉の庭に来て鳴くよ

妙高山池の平温泉 三句

あけくれに霧ふり萩は咲きいでぬ

山霧やおそき螢が窓に来る

青萱の原ゆく馬に雲の影

上高地

焼岳は夏日に灼けて立つけぶり

炎天の火の山こゆる道あはれ

白樺を幽かに霧のゆく音が

白樺の道なりければ空涼し

夏山の雪近みかも木がくれに

葛の花ひとりの湯浴みあけはなつ

岩魚干す日は白樺の真上なる

落葉松の西日のキヤンプ道の辺に

穂高岳霧さへ嶺を越えなやむ

穂高岳真日さす霧の立ちにけり

菅平の雪

十二月三十日菅平スキー場に赴く。夜行列車にて

凭れたるスキーにねむりあさけれど

スチームの寒きめざめに雪を見る

明けゆくや浅間の火さへ凍る窓

明けゆくや枯桑が見え家が見ゆ

大洞川釜谷に沿ふてのぼる

櫓の道雪あたらしくかゞやけり

櫓の道灌は氷りてなほかゝる

雪折やひとすぢわたる蔓もどき

スキー場

雪ふかくヒユツテの扉あり松飾

雪の山浅間は晴れて目にいたく

雪とけてキヤベツまるべり日輪に

落葉松に鳥もる鳴かず雪険し

帰途

雪の山はだかり暮れて谿さむし

谿かげの雪に座りて蜜柑食ふ

五日月照らさぬ岨は雪明り

別所温泉

硫黄の湯道辺の雪に湧くところ
大年の簀祭に映ゆる雪

車中

浅間の火雲染めて年ゆかんとす
スキー行つかれまどろみ年去りぬ

昭和八年

葛飾の山鳩

山鳩に真間弘法寺は雪を敷く
雪の竹山鳩居りて幽かなる

老梅のめでたく咲くにけふの雪

山鳩やたそがれ白き梅の梢に
梅さむく鳩は林にかへりけむ

箱根路

八重樫箱根の雪はみなきえぬ

雲雀籠吊りしは古きいでゆかな

旧道

菌朶垂れてひそかに春の雪を置く

早雲山 二句

山駕のいこへる庭の馬酔木かな
山駕におどろく雉子の翔ちにけり

大湧谷 三句

馬酔木咲き硫黄の華も道のべに
岨に立つけぶりのひまに馬酔木かな
とゞろける地獄の空を石たたき

雉子の道 二句

蘆の湖の湛えしづかに初葎
みづうみをこえくる雨や初葎

三峰行

桑畑や秩父の雷のまだきより
朝わたる雷をかしこみ田草取

桑の蟬鳴きいで雷は遠空に

鹿の湯と名に負ふ温泉あり葛の花
谷さやかみんく蟬の声とほる

登山

はた、神三峰山に居りたまふ
径ゆくやなほいかづちの雲の上に

雲取の真神ゆくなり霧昏く

霧の原真神がゆける萱なびき

夕立雲葛咲く谷へ下りしづむ

『秋苑』

昭和九年

湯檜曾の雪

大雪のスキー列車の夜をいねす
雪の山夜空をせばめ立ち並ぶ

湯檜曾橋膝をうづむる雪積みり

谷の温泉の灯はくられど雪明り

雪の瀬に獲たる魚ぞと炉に焼けり

古き機ふるき燭置き機始

雪袴つけたるひとの機始

青天の吹雪わたれりスキー行
樞鳥のこぼす粉雪の光り舞ふ

四方の山夕ばえきたり雪凍てぬ

新春小遊

天城山中

初富士を見出でし岨の氷柱かな

秋川の谿

多摩郡夏川峡をながれいづ

夏山に雲居りやせし瀬のながる

雨蛙瀧はしづかにかゝりをり

山女釣わがゆく橋をうち仰ぎ

梅雨空のうぐひす鳴けりこゑひそか

木苺に瀧なす瀬あり峡の奥

野尻湖

山路にて

夏山の霧わくかたに湖は見ゆ

霧の湖しらがね曇りまたひかる

夜霧朝霧——妙高山池の平にて

夜空なる妙高よりぞ霧ながる

月の木々葛をまとへり葛ひかる

月の道霧あらはれて顔に来る

霧ひゞき朝ひぐらしのこゑおこる

霧凝りて山紫陽花に雨となり

岩原スキー行

スキー列車

新雪を踏むべきスキー立ちならぶ
山迫り新雪窓にせまりたる
車掌来て雪のふかきを告げ去りつ

スキーハウス

黎明の氷柱うつる暖炉の火

雪の山朝焼雲のすぐあせぬ

暖炉燃え紅茶の檸檬よくかをる
蓄音機ジャズを奏でて雪晴れたり
四方の山まはゆく暖炉火をおとす

スキー場

白樺の若木埋もる雪をゆけり

聖らなる嶺の雪踏むつましく

樹氷立ち傾斜はたゞに谷へ落つ

雪眼鏡ぬぐひ紫雪に眩惑す

昭和十年

山上湖結氷

見がほしき赤城の大沼氷りたり

氷る湖あけゆく光こゝになし

氷上に雪うち敷きて道かよふ

風すさび氷上の雪立ち舞へり

結氷期赤城の神は風を駆りぬ

戸隠山鳥声放送

童起きラ子才かけにけり短夜を
山の鳥短夜の夢に鳴きいでぬ

ゆめみつゝ霧をおもへり夏山を

老鶯の声高鳴くこゑは夢ならず

郭公のふと近く鳴くあまたゝび

山鳩は新樹にかこもるこゑとほき

多摩の横山

水無月の青山は桑のあをき山

鮎釣が家路いそぐと越ゆる山

むらがりて青紫陽花の道に垂れ

枝蛙鳴くせはしさに踏みまよふ

枝蛙いまははるかなり道も絶え

ふもと田の螢か桑に来てひかる

浅間山

鬼押出風景

鬼押出風景は浅間山の北麓にあり、天明年間噴火の折、熔岩

流出して部落を埋めしあとなりといふ。

こゝにして炎天の熔岩群立てり

浅間嶺の北の山肌灼けてせまる

炎天の噴煙わたり岩むせぶ

灼けし岩噴煙けぶり行きがたし

岩近くあはれ老鶯のこゑおこる

つじヶ原

夏雲の翼の影ぞをわたる

草に鳴く老鶯に草の波立てり
夏草の波立ち青嶺かくれける

峰の茶屋

炎天の谷ゆたちまち霧わけり

小浅間はすなはちかくれ霧越ゆる

霧に立つ火山観測所真白なり

軽井沢

落葉松の家

落葉松の霧ながれ入り家めざむ

井を汲みつ朝ひぐらしを手にとらふ

郭公のこゑちかづけり椅子に居れば

郭公に飽きてぎゝをり鳴きつぐを

郭公のとほざかるこゑこだませり

旧軽井沢町

日覆照り古うまや路はかくれける

日覆して銀座の店のこゝに並ぶ

ラケツトを売る店青き日覆延べ

仏蘭西語日覆の前をすぎてきゝぬ

ゴルフレインク

雲のゐる嶺につゞきて芝あをし

芝すゞしとほき木立をわたる雲

雲下りてひぐらし鳴けり雲間より

高原列車

朝

夏山に朝湧く雲の湧きつげる
黄のダリヤ碓氷の関の址に燃ゆ
日影澄み暑からぬこゑの蟬鳴けり
葛の花見やれどとほく瀧かゝる

夜

谷ふかく家居のありて蚊火もゆる
稲妻は岨の真葛にはしりたる
扇風機灯蛾吹かれては灯につどふ
月いでぬ灯蛾こぬ窓をあけて寝る

乗鞍岳

番所原をゆけば乗鞍岳の山容あきらかに見ゆ

乗鞍岳雪さやかに桑の上に
飛驒に湧く夏雲嶺を越えきたる
雲の影落ちて夏山を深くしぬ
万尺の夏山にむかひ径つゞけり

鈴蘭小屋

蕎麦を植ゑその花咲かせ翁住む
雪溪をあふげばそこに天せまる
雪溪は夏日照るさへさびしかり

飯松帯ちかく

穂高岳雷雲の上に巖そびゆ
穂高見て深山の蘭を敷きいこふ
夏山を統べて槍ヶ岳真蒼なり

雪溪をのぼる

攀ちがたき雪溪と見れば霧かゝる
雪溪をかきくらしゆく霧絶えず
雪溪に径はありけり踏みゆけば
なほ高き雪溪が霧のひまに見ゆ

肩の小屋にて

天騒ぎ摩利支天岳に雷おこる
摩利支天雷おさまりて霧吐ける
嶺うばふ霧たちまちに海をなせり
雪溪をかなしと見たり夜もひかる
霧さむく炉に偃松を焚きてねむる

夜明の疾風

偃松を走せくたる霧の瀬を見たり
霧疾しはくさんいちげひた靡き
濃むらさき岩桔梗咲けり霧の岨

頂上登攀。頂上は剣が峰を主峰とし、朝日岳、摩利支天岳、

四つ岳等に分かる。朝日岳にて

岩に凭り霧にむせびて言をわする
岩をふみ岩をかき消す霧をよづ

剣ヶ峰頂上

三角標霧立ちのぼり渦巻けり
三つ立たす霧の祠のしづくせり
白米をあげし宝前を霧ながる
霧凝りて三柱の神ぬれたまふ
飛驒の国をうつろとなして霧湧けり

三角標霧に朽ちたり飛驒の霧に

下山

追ひせまる霧や雪溪をすべり下る
霧の海木曾駒ヶ岳を浮べたり
霧の沢白樺みだれ潰えたる